

六月二五日（日）

久しぶりな気がする二人だけの夕食を終え、食卓で大河ドラマを見ながらビールを飲んでいる。志津香が鼻屑にしている俳優が出てくるというのに、彼女はただテレビに背中を向けて、洗い物を片付けていた。

「もう直ぐ、出るんじゃないのか？」

私は、水の音に負けないよう大きめの声で言った。

「もう終わるから大丈夫。見逃したら、再放送でも見るわ」

洗い物ぐらい私にもできるのに、彼女はこちらを振り返ることもなく食器を洗い終わると、自分の手を洗い、タオルで手を拭いた。エプロンを外し、近くの椅子の背に引つ掛けながら、私の隣に座った。

「お前も飲むか？」

彼女は私のグラスをチラリと見て、首を横に振った。

「お昼も飲んだし」

「お茶は？」

志津香が小さく頷いたので、私は冷蔵庫から麦茶を取り出し、新しいグラスを出して注いだ。彼女はお茶で喉を潤すと、全身でテレビに向き合った。これ以上は、変に話しかけない方が良さそうだ。

私もテレビに視線を向けるが、彼女が見るからつけているだけで、話の流れや配役がよく分かっている。妻の楽しい時間を邪魔しないよう、ひっそりと隣に座って、静かにグラスを傾ける。

今日は久しぶりに二人で電車に乗り、梅田まで出かけて帰ってきた。普段は子供らや孫がいるか、車で出かけることが多く、出先で一緒に飲酒する機会なんて滅多になかったが、今日はうめきた広場でやっていたキリンのフローズンビールを楽しんだ。

夜からの雨予報に備えて早々と切り上げてきたものの、屋外でビールを飲む妻を、もう少し見ていたかった気もする。もう一度強い雨が降れば、そのうち梅雨も明けて夏本番。今年の夏は彼女も連れ回して、外での飲食を楽しむのも悪くない。

私の視線を感じたのか、志津香がこちらをチラッと振り返り、「何？」と言った。私は「別に」と視線を逸らし、食卓の端に積み上げられたチラシの山に目を留めた。今日出掛けた時にもらってきたのか、旅行代理店のパンフレットがいくつか積み上げられている。目的地はそれぞれ、ハワイにニューカレドニアにモルディブ。それから、サイパンやグアム、ベトナムといった地域も混ざっている。

中は我々よりもグッと若い世代、ハネムーン向けらしいパッケージプラン、写真が載っていた。ハワイは我々もほぼ半世紀前に新婚旅行で訪れたけど、もう随分変わってしまったようだ。

青い海や広い空の写真から顔を上げると、志津香がテレビを消して、こちらを見ていた。空になったグラスを持って、流しに運ぶ。私のグラスも一緒に片付けてくれた。

「旅行、行きたいのか？」

「そうねえ。新婚旅行ぶりのハワイとか、『天国に一番近い島』のニューカレドニアとか、『深夜特急』をやってみる、とか」

志津香の思わぬ冒険心に内心驚いていると、彼女は「冗談、冗談」と大きな笑顔を示した。

「あなたが免許返納する前に、車で温泉旅行ってところじゃない？」

「二人だけのドライブ旅行か」

「なんだか、終活っぽくなっちゃうけど——」

志津香はそこで言葉を切ると、グラスをさっと洗って水切りカゴに伏せた。

最後のドライブ、意外とすぐだな……。

初出 令和三年六月一二日 Mediumにて公開